

～ セピア色の風景 ～

「兎(うさぎ)」

青田 茂雄

仙台建設業協会専務理事

子供の仕事は色々ありました。そのひとつが、毎朝もしくは毎夕出かける家畜の餌の草刈りです。牛や馬の食べる量は、それこそ「馬に食わせる程」の言葉があるとおり大変なものです。

そこでわが家では、小さい子供は、量が少ない兎の餌の草を刈ることから教えられました。刈る技はもちろん、鎌の研ぎ方、鎌の管理の仕方、いい草悪い草の見分け方、餌の与え方など。初心者用の鎌の柄には、火箸でカタカナの名前の焼き印が押されました。鎌を研ぐときは、掌に鎌の刃を載せるように添え、ま

草に駆逐されずに生え続けました。周辺でも家畜を飼っていましたが、いい草を刈るのは競争でした。そろそろ伸びた頃だと勇んで行くと、既に刈られ悔しい思いもしました。

兎を大事に扱うことを教えられ、持ち上げるときは耳を鷺つかみするものの、体重が耳にかからぬように片手は必ず兎のお尻の下にあてがいました。兎は非常に神経質で、喉元の毛玉(母兎は毛玉を自ら食い取り、赤ちゃんのベツドにした)のでき始めで分

かっていたかのように、自転車の荷台にかごを付けたおじさんがやってきました。商談がまとまり、おじさんがかごに入れるときは、兎は耳だけつかまれ暴れる中を、無造作にギユウギユウと詰め込まれました。小遣いは手にできるものの、そのときだけは兎と目を合わせられず、その場を逃げ出したくなったものでした。学校に行っている間に兎

が買い取られたときなどは、帰宅後空になった兎小屋に、無性にさびしさを覚えました。

しかし翌朝には、桃太郎話ではありませんが兄は牛用の草刈りに、弟は残った兎のため草刈りに出かけていくのでした。

●あおた・しげお 1956年生まれ。福島県相馬市出身。2016年5月から仙台建設業協会の専務理事を務める